

【宇和盆地の建築文化】

宇和島藩の穀倉地帯として栄えた宇和盆地には、明治以降も米・木材・養蚕などの生業地として豊かな家並みが形成された。社寺なども含むそうした建築群を下支えたのが、俗に三崎大工とか半島大工と呼ばれた人々である。彼らのルーツは佐田岬半島であり、現在の行政区分では伊方町や旧保内町（現八幡浜市）辺りも含まれるかと思われる。

地域における棟札の悉皆調査が実施されている訳ではないが、いくつかの事例を追う中で、その実態イメージに迫ってみたい。

【国重文・開明学校】

明治15年に竣工するこの擬洋風校舎は、屋根裏にあった棟札により大工棟梁が都築熊吉、三崎の人である。構造的には在来の伝統工法ではあるが、開放的なベランダ風の廊下やアーチ窓意匠に当時の精一杯の洋風アレンジが見て取れる。他にも、同20年に宇和で最初の警察

署、あるいは同32年に歯長寺本堂の修復、またその周辺や伊賀上にある数軒の民家など、明治の初めから30年代にかけて、熊大工という通り名で腕の良い評判の棟梁として伝わっている。



国重文 開明学校

【国登録有形・明石寺】

明治15～23年にかけて本堂を建てたのが、亀井千代治（伊方中浦）と宇都宮梅太郎（伊方川永田）。地蔵堂の方は、同35～42年にかけて清水太三郎・仙次郎親子（伊方亀



明石寺本堂



明石寺地藏堂

浦）。何れも、宇和盆地の氣候風土に配慮した凍害対策と思われる石州赤瓦が葺かれ、本堂正面の唐破風懸魚には鳳凰、左右の木鼻には獅子に模など、賑やかな装飾が印象的に眺められる。地蔵堂も四周に十二支の彫刻が巡らされ、彼らの彫り物に対する意気込みが伺われる。

【石城地区の民家二題】

まずは西山田にある河野虎治郎家。平屋の近代和風建築に当たるこちらは、棟札によれば明治38年5月2日に上棟しており、大工は三崎村字井野浦の濱上平治郎とあ

次に、岩木にある菊池慶次郎家。こちらは、大正4年の建築で、前述の明石寺地藏堂を手掛けた清水仙次郎が棟梁。かつて蚕種業で財を成したと思われる、軒高も高く材を惜しまぬ造りに。

明石寺、河野家、菊池家に共通する外観として屋根の箱棟には、何れも双竜、三崎大工の特徴と言えるかも知れない。



河野虎治郎家



河野虎治郎家 棟札

【三崎大工を深掘り】

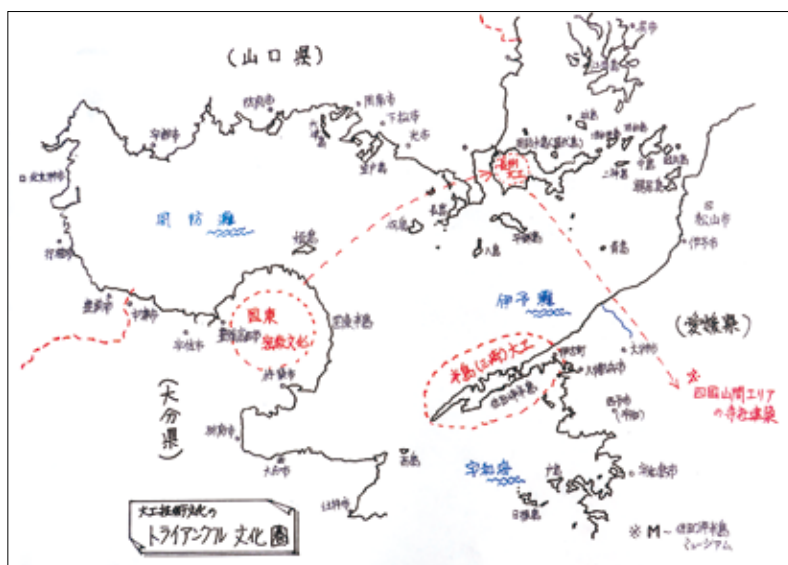
このように、佐田岬半島をくくりとする技術集団が宇和盆地における建築文化に影響を及ぼした大きな理由として、双方の経済地盤の違いが考えられる。半島域は平地に乏しく、米が生活基盤であった時代には、大変な苦勞を強いられたであろう事は想像に難くない。その生活維持のための技能として磨かれたのが大工の世界であり、杜氏の世界でもあった。あまたの三崎大工や伊方杜氏たちは、こうして他所で生計手段を得、そのスルが受け継がれていった。

似たような出自の大王集団に、長州大工（島）を故郷とする彼らは、四国山間地に分け入って数々の寺社仏閣を建ててゆく。中には、龍澤寺（城川町魚成）を建てた岡田一族のように地元に土着したグループもあった。東和町誌によれば、その技術的ルーツは大島と周防灘で二衣帯水の大分県国東半島（密教文化）に由来すること。（地図参照）

では果たして、半島（三崎）大工の技術由

来はどこに。この三角形の技術トライアングルに、とても強い個人的興味を覚えているが、現在佐田岬半島ミュージアムでは、地域の棟札によるデータ集積（平成26年に調査報告書刊行）を元に、その情報収集に余念がない。やがて解き明かされる時が来るかも知れない。

※参考・「宇和の人物伝」宇和郷土文化保存会（1993）、「西予市の文化財」西予市教育委員会（2008）



トライアングルマップ^①